

近世東海道紀行の諸問題

板 坂 耀 子

(昭和六十一年八月十二日受理)

一 「膝栗毛」の魅力

江戸後期戯作界に空前の流行を生んだ十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の典拠あるいは粉本については、種々の作品が従来考えられてきた。紀行・地誌関係の書としては「特に『東海道名所記』『竹斎』などに刺激されたものが多かったであらう。」(朝日古典全書 笹川臨風氏解説)「適当な粉本として従来考えられているのは『東海道名所記』で」(岩波古典大系 麻生磯次氏解説)などと、近世初期の仮名草子「竹斎」「東海道名所記」があげられることが多かったのに対し、中村幸彦先生は『東海道名所記』とは、記述の相似たところが多いのは事実である。しかしこれも『東海道名所記』そのものを見たのではあるまい。箱根路の旅に出るべく、計画した一九の机辺に置いた、今日でいえば旅行案内、当時の実用向の小冊、道中記が『東海道名所記』を一資料として、著わされたものではないかと考える方が、なまけものの一九らしい。」(小学館古典全集解説)とされ、「諸国道中記」なる一本を例にひかれる。「膝栗毛」に影響を与えた作品を追求限定することは本稿の課題で

はない。ただ「膝栗毛」の最大の魅力は、中村幸彦先生が同解説中で指摘されたように、既に旅の体験のある人々が「一九の短い土地の説明や描写に誘発されて」「楽しくその経験がよみがえって」くるところにあり、それに気づいた一九が、特に三編あたりから旅の趣、旅の情をいいて描こうとはしなくなり、「それは省筆してあっても、わずかしき書かなくても、読者が読過中に付加してくれる。それがかえって読者へのサービスである。ただ思い出すやすがだけちよっぴりと書いておけばよい。」といういきさつであったとは、私は必ずしも考えない。「旅の趣」「旅の情」が具体的に何をさすかにもよるが、むしろ、「膝栗毛」は、当時の誰もが熟知し体験していて、だから書く必要もないと思われていた旅における日常生活そのものを、克明に文章で再現したところに人気の原因があると思う。

こういった「誰もが体験する、ありふれた旅の実態を(ある意味ではぬけぬけと)克明に描写すること」は、実は従来、近世紀行文学における盲点であった。ともすれば、古典紀行のなぞり・再現と、新しい知識・情報を求めている探検記・奇談集の追求という二方向に流れがちだった

近世紀行の、その両方向から、平凡な旅の日常は、近世的である故に、未知のものではない故に、価値のないものとして、無視され切り捨てられていた。^{註1} たとえば許六「旅の賦」のように、俳人たちの俳文としてとりあげられたことはある。^{註2} それも散文詩としての文飾がこらされるため、今ひとつ生の旅の味には遠い。

俗語による会話文中心の散文という、おそらく最もふさわしいかたちで、「膝栗毛」は旅の日常を、しかも笑いと結合させて定着するのに成功する。それは、滑稽本の方面から見れば、笑いの対象となる日常生活の題材として、「旅」という多くの人の娯楽であつたものを発見した点で画期的だつたろうが、同様に旅の文学の流れの上では、笑いの対象にしかならない平凡な日常生活として旅を描くという点で、同じく画期的であつた。

「膝栗毛」のこういった旅の日常の描写は全編にわたる雰囲気の中にあるため、これといった個所の抜粋指摘はむずかしい。それでも「きた八」「ハ、アいかさま、いい娘だ。時になにがある^トきた八^トそこを見返し、さ^ッつける。むすめ前だれで手をふき^ッしを^ッ娘^ッこれはおまちどふさまでござい^ッやきのあちをあた^ッめ、てうし^ッ盆をもち出^ッ」^{註3} やした 弥二「おめへの焼た^ッ鱒なら味^ッかろふ^ッもてのほうをむいてよびながら、お^ッむすめ「お休なさいやアせ。奥がひろふございやす 北八「おくがひろいはづだ。安房上総までつづいてる」「北「ア、いゝさけだ。時にさかなは、ハ、アかまばこも白板だ。さめじやアあんめへ。漬せうがにくるまゑび、やぼじやアねへ。(中略) 弥二「(中略) 時にもふ吸ものが出そふなものだ 北「まちなよ^トふすまのあいだから^ト北「でる^ッ。今よそつていらア。ヲヤなむさん、神さまへあげるのだ。イヤアくるぞ^ッ」^{註4} なすいものをもつていで 女「おてうしをかへませふ」(初編より) といつた、おなじみの場面の数々を、そのいくつかの例とすると、少くとも

「さて下向道にもなりぬれば、今日の日はや暮はとり、あやしめられる旅の道、何と鳴海の浜千鳥、暁がたの一声は、旅寝の夢やさますらん。諸行無常の鐘の聲、罪ほころぶる御法とは、誰教へてや白玉か、何ぞと人の問ひし時、露と答へて岡崎の、宿にもはやく着きにけり。入日の色は赤坂の明日の日は吉田の宿、今ぞ三川に着きにけり。」(巻下) といった叙述に終始する「竹斎」にそれと共通する要素は少く(宿の描写は皆無である)、「男いふやう『いざや御房、茶屋に休み給へ』とて立寄り、あぶりどうふ、もちる、酒をとゝのへ、ふるまひけり。男は着のため鯉のあぶりものを買って食へども、楽阿彌はさすがにえ食はず、かくぞ詠みける。」(巻一)「酒匂、沼津より、大なる鮎を出して売。鮎常にあり。餅団子酒、みなよそよりは殊の外直段高し。さればにや茶屋みな奇麗に、人柄もよし。」(巻二)等の記事を持つ「東海道名所記」の方が同じ性格を含んでいるといつてよい。しかし勿論、中村先生の御指摘のように、「東海道名所記」は直ちに「膝栗毛」に直結するのではない。その間には、東海道を題材とした種々の書があつたはずである。

二 「吾嬬路記」について

享保六年に京都の書肆柳枝軒(茨木屋多左衛門)によって板行された貝原益軒「吾嬬路記」は、のちに大田南畝の紀行や秋里離島の名所図会にも引用され、現存する諸本の末尾の多様な年号の駄賃表、あるいは表紙題箋等の傷みによつても推測される如く、安永以降まで、きわめて実用的によく利用された東海道の案内書であつたようである。^{註5}

この書の内容について従来誤伝があるので若干ふれる。^{註6} 柳枝軒は見返し題脇の序文で

往年貝原益軒谷重遠両先生のしるせし道の記兩部を會輯して世の人

の見やすからむために袖のかゝみとなしぬ同じ往来のくり言ハ例の老のなすわざにや

と記し、更にその後の断り書に、

此記ハ京都を出。近江伊勢尾張三河遠江駿河伊豆相模武蔵九箇国。

往来の道路をしるせり。世に東海道といふ。往年貝原益軒先生の紀

行吾妻日記土佐の国谷重遠先生の紀行東遊草両部潤色合巻して桜木にゑ

り。世に広むる所也。名所旧跡に付事跡の長文ハ。其要用をしるして。全文はしげきをおそれ。別に附録に出す。見やすからしむため

也

とする。いずれも谷重遠(秦山)との「會輯」「潤色合巻」という文句を用い、しかもこの書は各丁を上下二段にわかつて、上段に「東海道下り」、下段に「東海道上り」として、ほぼ同一の記事を、ただ順路を逆にしたのみで記すという奇妙な構成をとっているため、次の高木家旧藏地誌目録に見るような誤りを生じた。

吾嬌路記 一冊 小本

貝原篤信、谷重遠撰

享保六年 京都 丁字屋源次郎板

筑前と土佐との二硯学の東海道記である、巻頭に四季の富士図四面あり、本文は上下二欄に区画して上段に益軒の吾妻日記(日本橋より京まで)下段に秦山の東遊草(京より江戸まで)を掲ぐ、二者別の紀行を取合せたもので、所々に宿駅のコマ画を挿む、本書原板は柳枝軒の刊本であるが、これは其後の求板。

この記述が更に国書総目録の次のような解説を生んで、混乱を重ねて

いる。

吾嬌路記あすまの一冊◎吾妻路之記・あづま路の記◎紀行◎貝原益軒・谷重遠著、柳枝軒編◎享保六刊◎国会・静嘉・宮書・東博・京大・慶大・教大・東北大・東北大狩野・一橋大・早大・日比谷東京・宮城伊達・岩瀬・高木・無窮織田・神習・村野 *益軒の紀行「吾妻日記」のみを単行したるものあり、益軒全集七(吾嬌路之記・一名東海道記)に収む

実際には、高木家目録の解説が述べるような内容の書は存しない。国書総目録の諸本中、私が見たのは傍線を附したものである。その他、天理図書館に二本があつて、いずれも高木家蔵書印を有し、前掲の解説はこの一本に関するものである。だが、その一本も含めてすべての板本は、上段下段同一の記事で、「二者別の紀行を取合せた」ものはない。それでは柳枝軒の言う「會輯」「潤色合巻」の意味は何かというと、これは板本「吾嬌路記」全体の内容が、益軒の紀行で現在福岡市貝原家に写本が残る『東路記』の一部(東海道にあたる部分)と、谷秦山『東遊草』とを以下に見る如く柳枝軒が徹底的に切りばり細工をしているのである。『東路記』を点線、『東遊草』を波線で示す。

○府中より鞠子へ一里半、府中に浅間の社あり。是は不二浅間の新宮也。延喜年中富士本宮を爰に勧請す。東照権現御尊敬有し社なり。本社二所北にあり。卯に向ひ、摂社南に立、巳に向ふ。山の宮、石壇百四級あり。同所南の山に穴有。そこしらずといふ。当社宮造り美麗なる大社也。日本にて神社の美麗なる事、日光を第一とし、浅間を第二

とすといふ。社領六百石附く。社官は新宮左近、惣社官内とて兩人あり。浅間の上の山を志豆機山と云。名所なり。

○熱田より佐屋へ行て川舟に乗、桑名へも行也。其道は熱田より岩塚

へ二里。此所々東へ半道
愛智郡中村也。かつもり馬場川尾越川の下也。舟渡也。川上萬場宿右に八劍

大明神有。岩塚半里あはでの森あり。

より半里あり。すなご、秋たけ、右たうしま、左かつら、右やす松、神

守宿此所はうとし大明神右にあり。神体仮面二つと三。萬場より神守まで一里半九丁有
神守より東乙の子三位法印の在所也。神守古城阿部氏居るよし。今は田となる。

おそらく、益軒の『東路記』から抜粋してこれ以前に板行した紀行・案内記が好評だったため、柳枝軒が、東海道という需要の多さを見越して板行したのだらう。補充に谷秦山の作品を使ったのは、未刊の東海道紀行中では同じ儒者の秦山の紀行が異和感もなく適当と考えられたのであろうか。

秦山の『東遊草』は私が見た東京大学図書館蔵本以外にも数点が写本で存する。また益軒の『東路記』も現存の貝原家本の他に柳枝軒が一本を渡されていた可能性が強い。したがって板本「吾婦路記」の、二書にない部分を直ちにすべて柳枝軒の加筆と断ずることはできない。ただ、同じ『東路記』をもとに、それまでに板行された「諸州巡覧記」「木曾路記」と異り、柳枝軒がどのようなかたちにせよ加筆を行わねばならなかったこと、上下二段にわかって同一の記事を記すといった形式をとったことは、やはり益軒の『東路記』における東海道の部分の記事が板行に充分でなかったことを示すだろう。読者への知識の伝達を己れの紀行創作の動機として位置づけていた益軒にとって、多数の人に周知のこの街道は、木曾路その他の未知の街道や名所がひしめく都会のようにには制

作意欲を刺激されず、記述の焦点は定まらなかったようである。もとより宿の描写などはない。食物や茶屋に関する記述も皆無に近く、内容の大半は古典の引用と歴史的事実の紹介、道筋の説明にとどまる。

なお、柳枝軒が序文で述べる「附録」は本文中にも「委くは附録に出せり」といった記述を散見するが、まだ発見できない。板行されなかった可能性も強い。

三 「東海道名所図会」の影響

「吾婦路記」中に典故として明記されている書名、文学作品名は、和歌9（家長、雅章、実朝、西行、光広、家隆、経家）・長明道の記6・丙辰紀行3・いざよひの日記2・その他紀行類5（足利義教、宗久など）・倭名抄5・風土記4・漢詩4（羅山・闇斎など）・東鑑2・万葉集2・謡曲2・鎌倉志・鎌倉大草紙・宗祇終焉記・曙の記・太平記・延喜式・平家物語・名寄・扶桑略記・広益俗説弁といった、きわめて正統的な書を基とした類のものである。柳枝軒の工夫のせいだけでなく、「吾婦路記」が読者を獲得した理由があるとすれば、それは、こういった書籍によって、東海道に関する知識を要領よくまとめたところにあったのであろう。

これらの書名の多くは寛政九年刊、秋里籬島「東海道名所図会」にもまた引用される。この「東海道名所図会」は当時における東海道に関するあらゆる知識や情報を集大成した観があり、その影響は大きい。当時の紀行文の中には、たとえば東京大学図書館蔵『東海道紀行』のように、

七里浜腰越より稲村まで四十二町あり東風六町^(マ)壱里を以て七里ヶ浜と呼此地古戦場^(マ)にして今も刀剣のたくひ古骨など砂中より出る南

方大洋にして風あらし時ハ浪打上て裾を潮に浸し此浜に黒き砂なり日に映すれハ光あり黒漆の如し土人鉄の砂といふ又花貝とて彩色したることく貝あり桜貝とも云此浜砂道にして歩するに煩し農家の牛に乘せて旅人も往来する

てふくや砂についたる浪の跡

(東海道紀行)

七里浜 腰越より稲村崎まで、渚道四十二町あり。東関の六町一里をもつて七里浜と呼ぶ。此所古戦場にして、今においても刀剣の折れたる、又は武具の鏑、或は骸骨など、真砂の中より出づる事あり。南方は大洋にして、風あらし時は浪打ち上げて、裾を潮に浸す。此浜に黒き砂あり。日に映すれば光あり、黒漆の如し。土人鉄の砂といふ。又花貝とて、彩色したるとき貝あり。又桜貝ともいふ。此浜砂道にして、歩する事煩し。農家の牛に乗りて往来する旅人もあり。(東海道名所図会)

あるいは同じく東大図書館蔵『吾妻路名所道知辺』のように、

○大磯 相模

平塚まで廿七町此磯辺より盆山石出る茶店に出してこれを賣ふ家多し

○虎子石 駅中延台寺にあり当寺に此石の縁起あれとも詳ならず
(吾妻路名所道知辺)

平塚まで二十七町。

相模大磯

此磯辺より盆山石出づる。茶店に出してこれを賣ふ家多し。

虎子石 駅中延台寺にあり。当寺に此石の縁起あれども詳ならず。

十郎慷慨愛^{ストラッ}於^ニ鬼^ニ。血氣^ニ。武人犀甲^ニ。軀^ニ。妾婦當時^{フヤニ}。誓星否^ハ。
隕成^{オチ}此石^ニ。似^ニ。望夫^ニ。
羅山子

(東海道名所図会)

と、ほぼまったく同一の記事を記すものがある。特に後者の『吾妻路名所道知辺』は、冒頭と、一部挿入された木曾路の部分を除くと全編が「名所図会」の要約にすぎない。また岩瀬文庫蔵の天保九年序、渡辺政香『吾妻路の拾遺』のように、

吾妻路の日記ハ代々何かしけれかしの花や紅葉とあやなせるを東海道名所図會といふさへありてから歌佛ふミのことともまておつることなく物しつれハ其巻を見るにこの道の名たゝる処一目になんミゆめるここにすきし弥生のころ吾妻江くたり程なく帰来るを或人の旅路の筆のすさひハいかなといへりおのれこたへ□そハはやく何かしけれかし物したるおほけれハ今さらことさらひて何をかいはんしかハあれとたゝにやむも本意なきわさになんあれハかの名所図会にもれたる古事をとりいれかつおのか拙き歌やから歌をもそへて三巻となし吾妻路の拾遺と名つけつ(傍線筆者)

と明確に「名所図会」を意識した序文を有し、写本三卷三冊の旅の記を、書型、内容すべて名所図会の形式で記す例もある。更に天理図書館に巻一のみが存する、嘉永五年序、小林百枝著・山崎武陵画の板本「東海道旅文車」も、その凡例に、

紀行の書。東海道を識^しせる者。藤原孝標^{たかすゐ}の女の更科^{さしな}日記^き寛治^{かんち}源光行の

海道記^{貞応二年源親行の東関紀行三年阿佛尼の十六夜日記}、^{仁治三年}阿佛尼の十六夜日記^{建治三年中等を始古今}人の述ぶる所。その幾十部なる事を知らずといへども。皆自己の意に任せて作文せる者にして旅客の爲にするにあらず。たゞ東海道名所記^{万治元年刊}、東海道駅路鈴^{延宝五年刊}等ありてよりその方に便する書許多あり。そが中に東海道名所図會^{寛政十年刊}ばかり便よきハ無し。されどその本ハかの落紙に掲せる者にして旅装に用ゐるて便ならず。故に今その要を摘ミ。又前書に佚せる古今雅俗の事述を増加し。以て旅客の間を消せしむ。

と記して、「名所図會」を評価し、記述の基礎とする旨を記す。

その「東海道名所図會」に引用された記事の出典として同書中に記されるものは、この書が大本六卷六冊と大部なため、小本一冊の「吾嬭路記」とは数量ともに比較にならぬ程増加するものの、いくつかの共通点は見えてとれる。たとえば林羅山「丙辰紀行」は名所図會でも20例の引用があり「東関紀行」の25例に次いで紀行関係の書では多い。近世初期の同紀行が持つ、知的興味を中心とした新しい紀行文としての存在の大きさを示すであろう。同じ羅山が板行に関与したり序文を記したりした「延喜式」も11例、「風土記」も8例と多い。人々の地誌的な記事に関する興味をみたとす題材が、こういった方面に求められてきていることがうかがわれる。更に「東鑑」33例、「太平記」18例、「平家物語」10例他、「曾我物語」「保元物語」「鎌倉九代記」「北条記」「梅松論」「承久記」「信長記」等の史書、軍記物の頻出は、近世の旅人たちが中世以前の旅には存在しえなかった「名所」として、軍記物にまつわる古跡に注目しはじめたことを示している。

しかし、それにも増して引用文献を一覧した時、虚心な印象としてう

けとめられるのは、夫木和歌集81例、万葉集34例、続古今和歌集31例、新古今和歌集31例、新拾遺和歌集25例、新後撰和歌集23例、続拾遺和歌集22例、古今和歌集21例、拾遺和歌集20例……といった和歌をはじめ、「東関紀行」25例、「十六夜日記」18例、「海道記」16例等の古典文学の多さである。それは、漢詩類やその他の書との割合において「吾嬭路記」とほぼ同様な傾向を示すといっている。

このことは「吾嬭路記」や「東海道名所図會」が、古典紀行や和歌の束縛から脱していないということではない。正確な検討はまだ行っていないが、たとえば「木曾路名所図會」では、古典紀行の引用はより少ない。軍記物類まで含めるならば、東海道は、まさに古典文学の舞台となつた名所の宝庫であり、それらを無視した紀行や地誌の制作は事実上不可能だったとみるべきである。

四 東海道紀行の有する二面性

享保十七年に江戸の須原屋から板行された松井嘉久「東海道千里の友」は「此編は東海の行程むまやとりを記して千里の友となつく名所旧跡の詩歌をひき神社仏閣の来由をあらはしあるは中仙道伊勢への道すらも残る事なく江都の花に旅立て月の都に至る玉鈴の道のつかれのたま／＼も心をなくさむるハ誠に千里の友ならむものか」なる序文を有し、横本一冊のきわめて実用的な道中記として書かれたものの様である。記事内容の随所に「吾嬭路記」(カッコ内に記す)の影響が見える。

鳥井の左に人穴有東鑑に出たる仁田四郎が入たりし所にハあらず(富士の人穴、東鑑に出たる仁田四郎忠常が入たる所にはあらず)

梅沢右に梅沢山と額かけたる寺有大なる藤有右にあつま山明神社有
(梅沢、梅沢山といふ寺右にあり。大なる藤有。右に吾妻山有。)

川くるわ川の向香貫と云所に灵山寺と云禪寺有此寺に小松重盛の石塔
有肥後守貞能建てしと也平家都落の後貞能重盛の遺骨を首にかけ東国
に下りしとあれハ此所に納けるにや(河曲輪、此川向を香貫といふ。)

靈山寺といふ。禪院有。小松内大臣重盛の石塔有。平家都落の後、肥
後守貞能、西国より重盛の遺骨を取て首にかけ、東国に下りしとあ
り。此地に納めしや。)

しかし記事ははるかに増加し、「此辺よりさつた海苔出ル」(由比より
興津へ)「当所竈細工名物也」(府中より丸子へ)「瀬戸此所に染飯とて
おこし米を□て売ル」(藤枝より鳴田へ)「矢倉姥か餅名物也竹の鞭名物
也」(草津より大津へ)の様な名産品の紹介も登場する。その一方で古
典文学に関する記事も多い。地名に対照させて項目のみ記すと次の様に
なる。

大磯(虎が石)・鴨立沢(西行)・箱根(宗祇)・千本松原(六代御前)
・富士(都良香)・草薙神社(日本武尊)・宇津山(伊勢物語)・佐夜
中山(西行)・矢作(浄瑠璃姫)・八橋(伊勢物語)・熱田(日本武尊)
・石薬師(山部赤人)

これらの記事は、刊年不明だが近世後期のものと思われる蓬左文庫蔵
「東海道風景図会」にも、ほぼすべてが登場してくる。同書の各地名に
関する記事を、古典文学が含まれる所のみ、項目で内容を記すと以下の
通りである。

品川(泉岳寺、海案寺、景時墓)・藤沢(遊行寺、小栗判官)・大磯

(虎が石、三社権現、鴨立沢、盆山石)・箱根(七湯、挽物細工、曾我
兄弟洞)・三島(千貫樋、黄瀬川、遊女うめぎく、宗祇終焉の地)・蒲
原(塩焼、北条の城、富士川、平家、くりの粉もち、富士石)・府中
(久能寺、草薙神社、阿部川餅)・鞠子(とろく汁、盆山石、宗長、宇
津の山、十団子)・岡部(六弥太社)・藤枝(田中城、蓮生寺、直実)
・金谷(菊川、宗行の歌)・日坂(飴のもち、佐夜の中山、夜なき松、
無間山)・見附(富士山、源皇上人)・浜松(熊野、天竜川、阿仏尼歌)
・吉田(火口、関の小万、豊川稲荷、光広歌)・岡崎(矢作の橋、浄
り姫、女郎)・池鯉鮒(八橋、今川義元、鳴海しほり)・鳴海(師長
配所)・宮(熱田神宮)・石薬師(薬師寺、赤人古跡)・庄野(焼米・
白鳥塚)・土山(田村明神、葉茶屋、多賀参詣路)

「千里の友」も「風景図会」もともに実用的、通俗的傾向が強い。そう
いった類の書においてなお、これら古典に関する記事を欠くことはでき
ない。まして一般の紀行文を記す際、東海道の紀行にはともすれば、こ
れら古典関係の記述が多くなり、必然的に古典的、文学的色彩を帯びる
ことにもなっていることが予想できるであろう。

しかしまた、その一方で、交通史の諸書を引くまでもなく、東海道
は、旅の設備がよく整い、庶民まで含めた娯楽的な旅が最も保障された
街道であったことは、これまた言うまでもない。「東海道風景図会」は
「五畿七道ハ天武帝の御宇勅に依てこれを定む升が中に東海道をもて冠
とすべし草薙の餘光煌々として松柏枝をならさず蒼々たる海原東日に照
られて浪の音静なり往来の貴賤老若となく昼夜となく傳奏の公卿藩屏の
諸侯商家の交易斗藪の業門或ハ風騒の行脚拔参丁稚込引もきらず」と序
に記す。また貝原益軒は「木曾路記」跋に「岐嶺路は(中略)行人すく
なくして、往来まれなれば、道の中、いそがはしからず、心しづかな

り、「日光名勝記」中に日光街道を「食物等も、東海道にははるかにおとりたれどもとしからず」と記す。いずれも東海道が他の街道と比較にならぬ程、快適な旅の条件を備えていたことを示すだろう。「膝栗毛」を生む要素が自ずと、培われていくのである。

明和四年刊「東海松の友」(蓬左文庫蔵)は「……自西諸侯之所履東海、五十三驛、旁郡比境參尾勢和之間悉作歌以録景勝之所、寓與陳跡之所、存無一掛漏、冀使遊觀者憶此歌而及所、廼探討其勝、其由而莫不覽而過之、悔也、一便暗記、故多取鄙俚俗諺而已、因風呼為狂歌、實古之狂、而直也……」(仙樓山人序)、「児竹庵か松の友はみつから折ふしことの道草につゝりをかれしを馴ぬゆきゝの道しるへ旅泊のつれゝをもわするゝひとつならんかしと書林八尾氏請もとめてさくら木にうつしぬる事を……」(承花堂舊雄跋)の如き序跋を有し、東海道五十三驛に関する記事のすべてを三百五十一首からなる歌によって紹介しようとしたものである。その中には、蟬丸の名も逢坂に年ふりし関寺小町さかゝみのミヤのように和歌に関するもの10例、

発句して御手向あれや芭蕉墓義仲様も御聞なさりやうのように俳諧に関するもの3例、

頼朝の御召なされし生好の駒ハこゝから出た植野村のように軍記物に関するもの17例、等もあるが、圧倒的に多いのは、旅したく思ひたつ身ハ足まめに京から三里すへて大津へ御廟のゝ左りのミねをかゝみ山ふもとに右の壇が御陵石薬師それより先ハ式里式十七町行て四日市なり

といった距離や位置、方向を示すもの41例と、
名物も瀬田ハうなきにミ蜩のからにもこんな景ハ有まい

今川て鳥の吸物吸ておきや酒屋ハ先の今岡にあり

味ふてしかも下直なかはやきと吸物の魚あらひてそ居ル

につさかの茶屋の娘かにぎり出す蕨餅食やこゝの名物

宇津の谷の坂を登りて地藏堂茶やの団子も名物て売

といった名物の食物に関するもの53例である。「東海道風景図会」にもこれらの食物はよく登場し、「東海道名所図会」にも主要なものは紹介される。こういった方面への興味や知識もまた、東海道の旅にあっては無視できぬものであったのだ。

東海道の紀行類は国書総目録で推測できるものだけでも70点近くが存する。それらの一つ一つを検討することは到底かなわないが、大まかに、三種類にわけることができる。まず、従来の紀行文学の形式を踏襲し、時に和歌等を挿入する、正統的なもの。第二に、名所図会や案内記、道中記といった、文学作品の枠を必ずしも守らず、多様な形式の中で知識の伝達や実用を目的としたもの。第三に公式旅行の際などに落士が記したかに見える記録、雑記類。これも「道中記」の書名を持つことが多く、「道中記」の語は、実用的案内書としての小冊子をさす他に、この種の記録をさすこともよくある。

第三類については、今はしばらくおこう。第二類の娯楽的実用書、より俗に近い類の書が、「膝栗毛」と共通する平凡な旅の楽しみの記述を次第に増加させつつも、古典に関連した記事は根強く残りがちであることは先述した。では第一類の正統的文学的紀行についてはどうか。ともすれば古典にまつわる名所で歌を詠み、それを羅列するだけの平板な作品になりがちなものが多い。しかし、その中でも、

旅人のわたし是あり侍れといまた水かさも高けれハ幼君にハけふも渡

り玉ハて猶あすの水落をまち給ひ鳥田の宿に止り給又籠の鳥も琉球犬もつゝかなく渡て金谷をうち過ぎよの中山をこゆる(寛政十一年、勝胤『東海道旅行記』、東北大学狩野文庫蔵)

堂内香炉の足に力士の人形ありちいさしと見ゆる事なれ共そバに寄手足を握りて見れハ大人の腕うでの如しそばあたり広大なるゆへ何品うぶ適もちいさく見ゆ(天保十四年、作者不明『上方行道中日記』、宮内庁書陵部蔵)

長崎といふ所民家なれハあやしき所ニ入てたゝミさへかたへハなし屏風もなくてむかひの家へかりニやるかいしやくしもなしとてかりニやるものはのゝきこゆ(浅井権十郎『東海道紀行』、金沢市立図書館蔵)のように、細やかで具体的な描写をして独自の旅の実態を描き出すのに成功している例はある。また、烏丸愛敬『東海道道之記』(寛政三年、大阪市立大学森文庫蔵)や源斐雄『東行之記』(文化十年、同上森文庫蔵)が、前半は和歌の羅列に近く、後半次第に、

明かたに宿りをたちて巳ノ時斗に荒居の海をわたる沖の浪に櫓行す追かせつよく波すさましやかて舟もくつかへらんやとむね打つふれて中詠吟もえいてきぬたゝ心中ニのミ祈念しける(『東海道道之記』)

沖津の茶店にて酒のむ今日ハ沙干也とて海布かり貝拾ふ人岩のはさま磯かくれにみちあへりおもしろき事限りなしさるほとに贅女二人打つれて門すへるをあれ呼てひかせてきかんハいかにとのたまふにこハ興

あることにこそと呼入たれハすのこに這あかり背たらおひたる袋よりやをらとりいつるハ琵琶なりやと見れハいとふるき三味のあやしき音しめあさやかにうちならし此方さまに居なほりておいらんの道中ハとはりあけたるにハ三保の松風もいかにハ吹あハせんや(『東行之記』)

と、旅の実態について長文の記述を記しはじめるのも、注目すべき傾向だろう。

結局、東海道紀行には、東海道自体が持つ二つの性格が反映する。根底は、それが常に最も早く開けてゆく街道であるという一事に起因するのだが、一方でそれは古典文学にまつわる名所を多く有し、また一方で古典とは関りのない庶民の旅を発展させる。旅の雅と俗といつていい、この二傾向を一つの作品の中でどのように処理していくかが、東海道紀行の一つ一つが常に与えられた課題であった。我々は、その工夫の一例を大田南畝の『改元紀行』(享和元年)にみる事ができよう。同紀行中に登場する文学作品類は、芭蕉発句3、羅山紀行1、服部南郭詩1、東鑑2、曾我物語1、東関紀行1、西行和歌1、光広和歌1、枕草紙1、十六夜日記3、光広卿の記1、為久卿の記1、東海道名勝図会1、益軒吾嬬路記2、土御門卿東行話説1、さらしな日記1、深草元政詩1、虎関禅師詩1、為村卿紀行1、新後撰和歌集1、続後撰和歌集1、夫木和歌集1である。従来東海道と関りの深い古典を中心とするこれらの諸書を引用して古典の世界をとりいれるとともに、南畝は、

此処は中富田村なり。或医者に住む格子に。他行療用断。といへる札掛しもおかし。右の方に水車あり。(中略)亀山の城下に入る。(中略)

城下の市中賑ひなし。四角なる形の物を軒に下げて。湯豆腐あり。油揚げあり。或は豆腐。蒟蒻など書る様ひなびたり。髪結床などありき。(中略) 此村の人家に水車輪板ありと書て出せし看板も珍らし。

目川の立場には。菜飯と田楽ありて。今何処にても目川菜飯と呼ぶは。此所より起れりと聞て。伊勢屋と云へる家に入りて。かの菜飯求むるに。田楽の豆腐あたゝかに物して味ひ佳し。爰に目川とも女川とも染付たる茶碗もて茶を勧む。珍らかなれば。二つともに買ひぬ。

などといった当時の街道風俗も積極的に記して、自分なりの東海道の全体像を築きあげようと追求しているようである。

しかし、ここで私は敢て『改元紀行』中の鳴立庵の記述に注目したい。

此辺りに虎御前の屋敷跡などありと云ふ。大磯の宿を過て。名に負ふ虎御石見んと延台寺に入れば。鬼子母神堂。虎池。弁財天の宮あり。石に太刀疵矢疵といへる物ありて。曾我十郎が身代に立てるなど。寺僧の語るも覚束なし。寺は延山十九世法雲院日道上人。慶長年中に創造せるとぞ。十郎慷慨愛於菟。といへる羅山子の詩の句も思ひ出られておかし。橋を渡りて彼の三千風が経宮いよみやといふ鳴立庵に入り。西行法師の像を見る。庵の中に短冊あり。

やよひの比鳴たつ澤に立より侍て

あはれさは秋ならねどもしられけりしぎたつ澤のむかし尋ねて 雅

章(華押)

これは飛鳥井亜相のなり。また。

宝永二年の秋とをりけるとき

いまでも猶むかしの秋を思ふそよ鳴立澤の夕くれの空 乗色

これは松平左近将監とて。享保の比政執れる人なるべし。又色紙あり。西行法師の筆也と云ふ。

つれもなくなくなりゆく人の言の葉そあきよりさきの紅葉也けり西行の杖なりとて有るは無くてもありなん。例の三千風が仮名文。傍の石に彫うづて建り。笈さがしと云へる物見侍りし事ありしに。三千風が歌に。

ありし世の鳴の羽おとはさもなくていまは澤辺に馬駕籠そたつと云へるこそ。中々誠の風情ならめ。少し興さめたる心地して。西行堂の後へより海面を見渡せば。実に小陶綾の磯の波。立去りがたき所なり。此庵なからましかば。哀れさも優りぬべし。

文人としての雅の意識から南畝は「この庵なからましかば」と嘆息している。本来、雅であり、古典世界への回帰であるべき、こういった名所は、それが有名になり、わかりやすいかたちをとり、物見遊山の対象となることによって、最も俗な名物となつて、庶民の旅の日常の中にとりこまれてもゆくのである。ちなみに、「東海道中膝栗毛」に登場してくる古典関係の東海道の名所は、大磯(虎が石・鳴立沢(西行)・久沢(曾我兄弟)・宇津の山(伊勢物語)・八ッ橋(同上)等で、次のように記述される。

それより大磯にいたり、虎が石を見て北八よむ

此さとの虎は藪にも剛のものおもしろの石となりし貞節

弥次郎兵へとりあへず

去ながら石になるとは無分別ひとつ蓮のうへにや乗られぬ

斯打興じて大磯のまちを打過、鴨立沢にいたり、文覚上人が刀作とき
こえし、西行の像にむかひて

われ／＼も天窓を破りて哥よまん刀づくりなる御影おがみて

〔膝栗毛〕初編

かく興じ、わらひつれて、西田海道より半里ばかり北の方に、名にし
おふ、八ッ橋の旧跡を思ひて

八ッはしの古跡をよむもわれ／＼がおよばぬ恥をかきつばたなれ

(同四編)

これは「膝栗毛」が古典紀行の傾向を残しているのとみるべきではない。
むしろ、そこに記されている名所の数々そのものが既に俗化していて、
食物や名物や宿場女郎と同様の旅の風物と化することによってのみ生き残
った光栄あるいは悲惨をになっていると考えるべきだろう。その意味
で、「東海道名所記」に同じ名所が記されているのとは、まったく異なる
性格なのであることも、確認しておかねばならない。

以上、論が多岐にわたって混乱の趣きもあるうが、東海道の紀行文を
今後読んでゆく際の、私自身のための一つの視点を定めるためにも思
って記した。御批判を頂ければ幸いである。

註

1 拙稿「近世紀行文学の要素」(福岡教育大学紀要第34号)参照。

2 「旅店のさま。上段に書院床。剣菱のすかし。火のなき火燵にやぐらかけ
て。門口の入湯桶。かたぶけて居たり。底に小砂のさはるは。夜べの残りも
いぶかし。出女のとて鳴は。春秋をしらず。根太板敷は落て。隅／＼まで畳

とどかず。天井襖は。雨もりにきはづき。鉄行灯はくらく。紙はわらんべの
心といふ事に燃たり。銭売。草鞋売にせがまれ。やう／＼に枕をかたぶけ。
心よき寝入はなは。馬さしの声に夢を破る。出立は七つといひふくめたる
に。旅人も亭主もよく寝て。夜のあけてふためくつらもにくし。(中略)海
道の売物に。餅酒のなき所もなし。磨針峠の餅をくはねば。未来焰王の前に
て。からきめを見ろといへり。寒天にも冷素麵をすゝむるは。逢坂の茶屋。
鰻頭のほか／＼と見えたるは。見付の台也。卵子の煮ぬきは。木曾の旅。は
な紙は竹にはさみ。銭の看板は筒をかけた。昆蟲の田楽は。何ものゝ喰け
るぞ。〔旅の賦〕より)

3 私が見た板本は概ね以下の六種類にわけられる。しかしこれは更に細分化
できる可能性もあり、多様な板行が行われたことを示す。①柳枝軒序を有
し、末尾に享保六年の「小学句読」以下33点の書の広告を附す。国会本・慶
大本(藍表紙、外題不明) ②柳枝軒序を有し、冒頭の名勝図に彩色、末尾
に「御改三割増」の駄賃表と、13点の東海道紀行広告、享保六年33点広告。
早大本(外題「あづま路の記東海道」・無窮会本(同上)・東博本(外題「且原
吾嬬路記 全」) ③末尾に駄賃表と、問屋・本陣表、享保六年33点広告。
京大本(外題「吾妻路之記」) ④末尾に「安永御改」駄賃表と、問屋・本陣
表。都立中央図書館本(外題「吾妻路之記 全」) ⑤末尾に安永改駄賃表と
伏見／＼太坂間船賃表と問屋・本陣表。東北大学狩野文庫本(外題不明)・
天理本・天理本(外題「あづま路の記」) ⑥序文の柳枝軒の書肆名を削り
「書林正宝堂蔵」を埋木したもの。天理本(外題「吾嬬路記」と写)・一橋大
本(外題不明)・東北大本(「あづま路乃記東海道」・無窮会本(同上)・宮書
本(外題不明) なお波線を附した二本に高木家の蔵書印がある。

4 拙稿「且原家蔵『東路記』の変容」(『江戸時代文学誌』第三号所収) 中で
私自身もこの点において誤りを犯した。深謝して訂正する。なお他の益軒紀
行の板行過程に関しては同稿を参照されたい。

5 益軒「吾嬬路記」も「吾嬬紀行」の書名で2例引用されている。